

教育研究業績書

氏名 富山 尚子
学位： 博士（人文科学）

研究分野

研究内容のキーワード

心理学

教育 認知 発達

主要担当授業科目

発達心理学Ⅰ・Ⅱ，教育心理学，保育の心理学，子どもと心理学，
心理研究の基礎，こころの分析，心理データの解析，課題研究A・B

教育上の能力に関する事項

事項

年月日

概要

1 教育方法の実践例

① スピーチ形式の発表の採用

平成8年4月
～現在に至る

心理学を勉強する学生には、例えば、保育士や看護師、教員などの将来人と関わっていく職業に就く学生も多い。社会人になると、「人前で話す」「人に分かってもらうように話す」ということが必要になってくると思われるが、なかなかそのことを訓練する機会は学生時代には少ない。そこで、担当するすべての授業において、授業の内容と関連するテーマを学生自身に決めさせて、短時間（5分程度）でまとめて他の学生の前で発表させるというスピーチの訓練を実施している。このことによって、授業についての学生の生の意見を聞くことができ、他者に自分の意見を伝えるという訓練の機会も与えることができると考えている。

② ビデオ・DVD等の使用

平成8年4月
～現在に至る

心理学においては、文字で説明するよりも映像で見たほうがわかりやすい内容（たとえば、乳幼児の発達の過程や学習の様子など）がたくさんあると考えられる。そこで、どの授業においても、内容にあった映像を随所にとり入れた授業を行っている。その時どきのテーマにあった映像を見て、感想や意見を求めることで、学生が自発的に考える機会や、学生同士の活発な討論の機会を与えることができると考えている。

③ 障害児および個別家庭における母子のケース研究・教育相談

平成14年4月
～現在に至る

幼稚園や保育所に在園する障害児（知的障害、発達障害など）のケース研究や個別の家庭における母子のケース研究を進めている。近年、幼稚園や保育所に入園する子どものなかに障害児が多く含まれるようになってきているが、現場では未だ戸惑いの声も多い。また、健常児でも家庭での子育てに対する不安を抱える母親も多い。そうした課題に対して個々の事例を検討するとともに、保護者への教育相談にも応じるよう多くの事例を収集すべく活動中である。

④ パーソナルコンピューター (PC) およびプロジェクターを使用したプレゼンテーション形式による授業	平成 14 年 4 月～現在に至る	大学の通常の講義室においてもプロジェクター等の使用が可能になり、PC を接続して、プレゼンテーション形式での授業が可能になっている。そこで、多くの担当授業において、PC を用いたプレゼンテーション形式の授業を行っている。そして、文字だけでなく、画像を取り込んだり、簡単な実験の説明を動画で行ったりすることで、これまで以上にわかりやすく、学生の自発的な参加も促すことのできる授業を行うことを試みている。
2 作成した教科書、教材		
① 配布資料	平成 8 年 4 月～現在に至る	担当する授業では、常に毎回独自に作成した資料を準備し、学生の授業の理解に役立つよう配布している。資料は、その日の授業の流れを示しながら、重要な知識は授業に参加することで得ることができるように工夫して作成している。
② プレゼンテーション形式の教材	平成 14 年 4 月～現在に至る	様々な関連する教科書、学会や研究会などで得た新しい知見を盛り込みながら、授業ごとに独自の教材を作成している。市販の教科書をそのまま使用して、それをたどりながらの授業ではなく、トピックごとにふくらみのある教材を作成し、使用するようにつとめている。このような形で、教材を作成していくことは、随時学生からの要望も採り入れ、具体的に知りたいという要望のあるトピックについて柔軟に対応できるという大きな利点もあると考えている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
学生による授業評価	平成 8 年 4 月～現在に至る	担当した授業においては、大学で実施する授業評価のみでなく、必ず、すべての授業終了後に何らかの形で授業に対する評価を行ってもらっている。具体的には、「授業が期待通りのものであったか」「授業に満足(もしくは不満足)であった場合の理由」「今後の授業に対する意見」などを尋ねている。具体的な内容には個人差があるが、概ねよい評価(例えば、5段階評価で4以上)を得ている。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		「該当なし」
5 その他		「該当なし」

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許		「該当なし」
2 特許等		「該当なし」
3 実務の経験を有する者についての 特記事項		「該当なし」
4 その他		
① 研修会の講師 (高知家庭裁判所調停委員・青年友の会の研修会)	平成 14 年 7 月 31 日	高知家庭裁判所調停委員の方々からの依頼により、青年友の会という研修会において、ボランティアで講師をさせていただきました。テーマは、「法と心理学」ということで、法と心理学の関わりについて近年話題になっていること、特に目撃者証言の問題（犯罪を目撃した際の記憶が如何に曖昧であるか、どれだけ信頼できるものなのか等）や、子どもを証人として質問する際の注意点などについて、具体例を交えながら 1 時間の講義を行い、その後いろいろな意見交換の時間を持たせていただいた。
② 公開講座の講師 (東京成徳大学子ども学部公開講座)	平成 22 年 8 月 10 日	平成 22 年度東京成徳大学子ども学部公開講座（子ども・生徒問題シリーズ 7）「『つまずき』を超える」において、「人間関係の『つまずき』を考える」というテーマについて講義を行った。感情や認知、愛着などの問題と人間関係のつまずきの関連について、参加者と一緒に考え、意見交換を行った。
③ 川崎市子どもの権利委員会臨時委員	平成 23 年 6 月～10 月	調査部会委員として、調査の分析、報告書の作成を行った。 「川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査 報告書」（平成 24 年 3 月）
④ 寄居町立桜沢小学校 家庭教育学級 講師	平成 23 年 7 月 1 日	埼玉県大里郡寄居町教育委員会の依頼により、町立桜沢小学校の家庭教育学級にて、「生きる力をはぐくむ子育てとは一子に対する親の関わり方—」というテーマで、講演を行った。
⑤ 公開講座の講師 (東京成徳大学子ども学部公開講座)	平成 24 年 12 月 1 日	平成 24 年度東京成徳大学子ども学部公開講座（子ども学シリーズ 2）「本当に子どもは変わったのか『子どもの成長と学習』」において「感情の発達と学習」というテーマについて講義を行った。感情と学習、感情の調整機能の発達、子どもとの関わり方などの問題について、参加者と一緒に考え、意見交換を行った。

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書, 学術論文等の 名称	単著, 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所, 発表雑誌 等又は発表学会 等の名称	概 要
(著書)				
1. 「認知と感情の関連性」	単著	平成 16 年 3 月	風間書房	認知機能と感情の関連について, 記憶を中心に総合的に検討した。感情の中でも, ある程度持続すると考えられる気分に注目し, その影響について詳細な研究を重ねた。研究の対象は, 大人だけでなく, 子どもにも広げ, 発達の知見を得ることを試みた。本研究の結果から, 感情の調整という機能の中には, 人間の本来の機能として生得的に持っている部分と, 社会的な経験などを必要とする発達の部分の両方が存在することが示され, この視点は認知発達に関する臨床的な分野にも応用可能であると考えられた。特に, 障害のある子どもの感情や認知の発達, 学習障害について考える上で, 障害のある子どもの, どの認知機能のどこまでが生得的な要因に規定されているのか, どの部分は発達可能なのかを, 感情の発達と関連して考えていくことは, 非常に有用であると考えられた。
2. 「物事の見方・考え方を变える」	共著	平成 19 年 9 月	児童心理 2007 年 9 月号 NO. 865/ 金子書房/P87-91	「がんばれない子へのかかわり—親・教師にできること」という特集の中で, 感情と認知の関係や感情の調整能力を発達させるための方法, メタ認知能力の発達の重要性と育てるための方法などについて認知心理学および発達心理学の視点からの提案を示した。
3. 「母乳と社会—母乳育児の現状」	共著	平成 20 年 5 月	深谷昌志 (編) 「育児不安の国際比較」 / 学文社 /P98-114	日本 (東京および地方), 中国 (天津), 韓国 (ソウル), 台湾 (台北) の 5 つの調査対象地域において, 母乳育児の現況についての調査を行った。その結果, 地域によって異なる授乳形態が認められ, それらの特徴は, 女性の就労状況, 社会的経済的状況, 母乳についての考え方や知識, 母親の最終学歴など, その地域のもつ様々な要因と関わっていることが示された。また, 一方では高学歴の母親には母乳嗜好が見られるというすべての地域に共通する結果もみられ, 母乳育児の実践と母親の母乳についての知識の強い関連もうかがわれた。

(学術論文)				
1. 「子どもにおける学習時のムードの効果について」(修士論文)	単著	平成6年3月	お茶の水女子大学	子どもたちが情報を学習する際に、そのときの気分がどのような役割を果たすのかについて、細かく検討した。通常、大人では、その時の気分と一致した内容の情報を学習しやすい(例えば気分がポジティブな時はポジティブな情報が学習されやすい)とされているが、子どもでも同様の結果が示された。一方で、ネガティブな気分については、条件によっては、大人では、気分の統制を行うような反応が見られる場合があるが、本研究の結果から、小学生でも気分の統制を行う能力を持っている可能性が示された。
2. 「児童が文を記憶する際のムードの影響」	単著	平成7年12月	心理学研究 第66巻第5号, P336-P344	子どもが様々な情報を学習し記憶する際に、気分がどのような影響を及ぼすのかについて検討し、中でも、気分不一致効果のおこる状況について、共感によって生ずる気分の統制の動機づけの観点からの考察を行った。これまでの研究では、比較的安定した効果であると考えられてきた“気分一致効果”が、状況によってはおこりにくい場合があることが大人を対象に検討されていた。しかし、子どもについての研究はほとんど見られなかったため、本研究では、子どもを対象に気分一致効果のおこる状況、逆に不一致効果のおこる状況について検討した。
3. 「認知過程に及ぼす気分の影響—気分一致効果と気分不一致効果—」	単著	平成9年3月	お茶の水女子大学 人間文化研究年報 第20巻, P209-P216	感情と認知過程の関連について注目し、特にある程度の持続時間を持つ、“気分”の影響について、これまでの研究の概観を行い、今後の展望について考察した。特に、気分の効果として、多くの実験でみとめられている“気分一致効果”について注目し、その効果のおこる状況とおこらない状況の詳細について、比較検討を行った。その結果から、気分と一致しない情報を再生することで、ネガティブな気分を調整するといった、気分の調整過程の存在の可能性が示された。
4. 「文作成時の気分の影響—気分一致効果と気分不一致効果—」	単著	平成11年2月	心理学研究 第69巻第6号, P441-P448	書くという認知的行動と気分の関連について検討し、特にネガティブな気分の際におこる気分不一致効果について、気分の調整を行うという観点から考察した。書くという行動は、記憶の再生過程などとは異なり、その行動を行っている最中に何度も自分の中で認知行動をモニターし修正していると考えられ、ネガティブな気分の調整がおこりやすい状況なのではないかと考えられ、本研究の結果からもそのことが示唆された。また、こういった気分の調整には、時間がかかり、時系列的な変化をみていく必要があることも示された。

5. 「認知と感情の関連—気分一致効果に及ぼす調整過程の影響—」(博士論文)	単著	平成 14 年 3 月	お茶の水女子大学	記憶などの認知機能と、感情の関連について総合的に検討した。中でも、ある程度持続する感情である気分注目し、気分の様々な影響について詳細な研究を重ねた。研究の対象も、大人だけではなく、これまで扱われてこなかった子どもにも注目することで、発達の見地から幅広い知見を得ることを目指した。その結果、感情の調整機能の働きの存在について指摘し、さらにその働きの大人と子どもとでは、違いが見られることを見出すことができた。
6. 「気分の調整と気分生起時の要因—イメージ法による検討—」	単著	平成 15 年 3 月	お茶の水女子大学 人間文化論叢 第 5 巻, P1-12	感情は認知機能と関連すると考えられるが、必ずしも感情が認知に一定の影響を及ぼすということではないことが、わかってきている。本研究では、感情の影響の不安定さの要因として、感情(気分)が生起する状況に注目し、気分の生起状況が異なる場合の、その影響の過程について、詳細な検討を加えた。その結果、気分が生起する状況によって、その影響過程に差が見られる可能性が示唆され、感情についての研究を進める上での新しい視点が見された。
7. 「記憶における気分の影響とその調整—時系列的変化の過程—」	単著	平成 16 年 3 月	お茶の水女子大学 人間文化論叢 第 6 巻, P9-19	これまでは気分と一致する効果がみられると考えられていた他者起因性の気分における再生時の要因(再生対象)の影響について検討し、再生時における気分の調整の可能性について検討を加えた。
8. 「ジェンダーフリー教育の実践研究とその普及」 内田伸子・富山尚子	共著	平成 16 年 3 月	お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム誕生から死までの人間発達科学 「家庭・学校・地域における発達危機の診断と臨床支援」総合報告書 第 1 集, P175-181	国際協力の視点から新しい女性教育支援のためのプログラム開発のために実施された、高校の特設科目「国際協力とジェンダー」および「ジェンダーフリーを学ぶ」の授業(開講 1 年目)における、大学教員と高等学校教員の連携による授業の実施状況および授業に対する生徒たちの反応を検討した。
9. 「ジェンダーフリー教育の実践とその普及—高大連携カリキュラムの開発—」 内田伸子・田中京子・荻原万紀子・菊池美千世・増田かやの・富山尚子	共著	平成 16 年 9 月	お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター紀要 第 2 号, P101-120	高校の特設科目「国際協力とジェンダー」および「ジェンダーフリーを学ぶ」の授業における、大学教員と高等学校教員の連携による授業の実施状況および授業に対する生徒たちの反応を検討した。国際協力の視点から新しい女性教育支援のためのプログラム開発のために、魅力のある授業内容および高校生に理解される内容を目指して、教材の開発にも取り組んだ。

10. 「ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識」 富山尚子・内田伸子	共著	平成 17 年 3 月	お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム誕生から死まで の人間発達科学 「基礎的心理発達過程の解明と教育的支援」平成 16 年度 研究報告書 P40-P54	高校生とその両親を調査対象として、ジェンダーに関わる側面（性差観、平等主義的性役割観、性差別化期待、性役割分業意識など）および子育て観を中心に、それぞれの持つ意識の特徴をとらえることを目的とした調査を行い、高校生自身の考えに、両親の考え方の要因がどのように関連しているのかについて、詳細に検討した。
11. 「ジェンダーフリー教育の実践とその普及－ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識－」 内田伸子・田中京子・荻原万紀子・菊池美千世・増田かやの・富山尚子	共著	平成 18 年 2 月	お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター紀要 第 3 号, P89-96	高校の特設科目「国際協力とジェンダー」および「ジェンダーフリーを学ぶ」の授業（開講 2 年目）における、大学教員と高等学校教員の連携による授業の実施状況および授業に対する生徒たちの反応を検討した。さらに、高校生自身とその両親のジェンダーや子育てについての意識に関するアンケート調査を行った。
12. 「日常記憶における気分の影響とその調整－発達の視点からの検討－」	単著	平成 20 年 3 月	お茶の水女子大学 人間文化創成科学論叢 第 10 巻, P73-283	気分の影響についての研究では、あまり取り扱われることがなかった子どもに注目し、気分の影響について再生時の自己（他者）関連性を考慮した実験を行い、大人の結果との比較を行った。その結果、気分の調整は、年齢の発達につれて社会的経験が増加し、知識が増えることによって適用される範囲が広がると考えられ、気分の調整能力は発達するものであると考えられた。
13. 「「育児不安」と母親の心理的育児不適応をめぐる一考察」 深谷和子・三枝恵子・開原久代・周建中・富山尚子・深谷野亜・馬場康宏・朴珠鉉・深谷昌志	共著	平成 20 年 3 月	東京成徳大学子ども学部研究年報 第 9 巻, P3-39	東京および埼玉の幼稚園児をもつ母親を対象に、心理的身体的活力の側面、心理的強さ、子どもへの信頼感などを中心に質問紙調査を行い、「育児不安」と様々な母親の育児行動の関連についての検討を行った。
14. 「母親による乳児の泣きの理解と不安」	単著	平成 22 年 12 月	乳幼児教育学研究 第 19 号, P73-81	就学前の子どもをもつ 3 つの地域（東京・埼玉・秋田）の母親の子どもの泣きの理解の現状と、泣きが理解できないことと母親の不安や母親としての有能感などの関連について検討した。母親自身の評価による子どもの泣きの理解の内容が明らかになり、社会が母親に期待する「泣きの理解」のイメージと、泣きを理解できないことへの母親の不安や有能感の低下との関連も明らかになった。また、1 人目の子育ての経験は、2 人目の子どもを育てる際に生かされ、泣きの理由がわからないことの不安や母親としての有能感の低下をやわらげることが示唆された。

15. 「実習経験が養護性に及ぼす影響—保育・幼児教育系学部における縦断的研究—」	単著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学子ども学部紀要第 2 号, P21-33	入学直後から 4 年次の最終実習後までの 6 つの時期における養護性の変化と、実習による乳幼児との接触経験の影響について、縦断的な変化の視点から検討した。 養護性については、「赤ちゃん・子どもへの興味」・「子どもに対するネガティブな感情」・「子どもをうまく扱える自信」・「親への準備性」の 4 因子が抽出され、6 つの時期における変化と、実習による乳幼児との関わりの経験の影響について検討した結果、調査時期の効果がみられたのは、「自信」についてのみであった。2 年次保育園実習直前と 3 年次保育園実習後の間、および 2 年次保育園実習直前と 4 年次幼稚園実習後の間にそれぞれ有意な差がみられたことから、実習を重ねることで子どもをうまく扱える自信がついていくことが推測された。
16. 「小学校への適応に向けて—小学 1 年生の保護者の意識—」	単著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学子ども学部紀要第 3 号, P9-17	子どもたちの小学校生活へのよりよい適応には、保護者が小学生の親という立場に適応できるかということが関係しているという視点から、親が必要としている適切な情報提供や働きかけとは何か、親が抱えている小学校への不安や期待とは何か、について具体的に把握することを目的とした調査を行った。 その結果、特に初めての子どもが小学校に入学した保護者に対して、最も必要な情報は、「担任の教員とのコミュニケーション面での不安」を解消できるような情報であることが示された。入学当初からきちんと保護者に小学校の様々なシステムについて詳細に説明し、必要な情報を提供することが、保護者の「担任教員とのコミュニケーションに対する不安」の低減のためには重要であると考えられる。
17. 「小学校と保護者の連携—入学直後の保護者の意識—」	単著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学子ども学部紀要第 4 号, P1-8	小学校 1 年生の保護者が小学校に対して抱えている不安や期待の構造について具体的に把握することを主な目的とした質問紙調査を行った。 第 1 子が小学校に入学した保護者では、まずは子どもが小学校という新しい環境に慣れることができるのか、先生は自分の子どもに個別にきちんと対応してくれるのか、といったことに対する不安や期待が大きいことが示され、子どもの性別によって不安の程度や内容に違いがあることも示された。

18. 「保育系学部におけるピアノ学習に対する意識について—入学直後と1年前期終了時の比較—」	単著	平成 28 年 3 月	東京成徳大学子ども学部紀要 第 5 号	大学 1 年生を対象に、4 月時点と 7 月時点の、ピアノ学習に対する学生の意識を比較しながら、ピアノ学習へのモチベーションの継続と関わる要因について検討した。 ピアノ学習に対する意識やピアノの授業に対するモチベーションは、ピアノ経験を重ねることで、高くなっていくことが示された。また、ピアノが上達すると、ピアノが楽しくなり、練習へのモチベーションも維持され、練習量も増えるという関連も考えられた。ピアノが上達するという成功体験を、少しずつでも重ねていくことが、モチベーションの維持に繋がり、練習量が増えればまたピアノが上達して、到達目標に近づくというポジティブな連鎖をいかに続けていくことができるかが、必要なピアノ実技能力を習得するための鍵となると考えられる。
(その他)				
(書評)				
1. “Self and Emotion: A Cultural Psychological View” by Shinobu Kitayama	単著	平成 12 年, Summer,	International Journal of Group Tensions, Vol. 29, No. 1/2, P207-P209	編集部からの依頼により、「自己と感情」についての北山忍氏の著書を紹介した。北山氏は、独特の“日本人（東洋人）の自己”についての理論を展開しており、氏の論文は欧米でも広く知られており、注目度も高い。本書は、日本語で出版されたものであるが、英文に翻訳される予定があったため、自己と感情に注目した研究を行っている著者が、心理学における文化の重要性に注目している読者の多い雑誌の編集部より、書評を依頼された。
(翻訳)				
1. 「子どもの認知発達」 (原題：“Cognition in Children” by Usha Goswami)	共訳	平成 15 年 7 月	新曜社	子どもの認知発達についての専門書の翻訳を行った。本書は、子どもの認知発達についての非常に具体的かつ最新の研究を網羅しているもので、翻訳を行うことで、広い範囲の読者（心理学関係、保育・教育関係、医療関係）に読まれることが期待される。 序章 (P3-11) 及び 9 章 (P331-344 : 子どもの認知の「何が発達するのか」、そして「なぜそのような発達するのか」) を担当した。 (共訳者：上淵寿, 古池若葉, 中島伸子, 岩男卓実)